

断りに用いられる言い訳の日英対照分析

西 村 史 子*

キーワード：反駁，譲歩，決まり文句，詳細説明

要 旨

本研究は、勧誘の断り談話における日英対照研究で、特に被勧誘者の言い訳を中心に分析したものである。断りの研究は日本語に限ってもかなりあるが、同条件下の談話資料を二言語から収集し対照した研究、言い訳の内容に注目した研究はまだない。本研究では、日本、ニュージーランド（以下 NZ）で友人同士のペア、各々 32 組、30 組から平均 48 秒、67 秒の談話をロールプレイの手法で収集し、書き起こしたものを分析資料とした。結果、両資料で同じような言い訳、勧誘方法が観察されたが、相違点も見られた。即ち日本資料で「体調不良」をより多くが言い訳として用いたこと/勧誘者の断りを受け勧誘者は、日本資料では被勧誘者の言い訳へ反駁する形で、NZ 資料では譲歩案を提示する形でより多く再勧誘が行なわれ、そしてこの再勧誘の仕方の傾向は被勧誘者の断りの言い訳の内容に関係なかったこと/日本資料で勧誘者が被勧誘者に対し断りの説明をより求め、そして被勧誘者も説明を供給したことが挙げられる。これら結果は、日本資料では言い訳は断りの方便であり、勧誘者は言い訳の内容によって臨機応変に交渉するというよりは極端に言うところ、そこで更に再勧誘するか、勧誘を断念するかの二者択一的に行動したように解釈できる。言い訳が方便でなく歴とした情報を伝えているかどうかはそこで詳細を聞き込むしかなく、このため日本資料でより詳細説明が生じたと思われる。これに対し NZ 資料では言い訳を字面通り受け取り、そこから双方に都合がよい妥協案を探る方向で会話が進められたと考えられる。日本資料で特に「体調不良」が多く使われたのは、それが翻しにくい状況であり、かつ断りの方便として常套化している可能性がある。

1. はじめに

相手の意に反したり、意向に添えない旨の発言をすることは、母語であっても難しい。例えば、不平・不満の表明や、依頼や勧誘への断りがその例であろう（初鹿野他（1996）、カノックワン（1997））。意に添わないのだから相手にある程度不快な思い、残念な思いをさせるのは避けられないかもしれない。が、それが最小限に済むように何らかの配慮を施すのが普通である。し

*NISHIMURA Fumiko：ワイカト大学人文学科（東アジア研究）講師

かしながらこれはいつもうまくいくとは限らない。外国語で話す場合はなおさらである。

例えば英語非母語話者である筆者が、英語圏でクレジット・カード会社から電話を受けた時のことである。自己紹介をされ、ちょっと話したいのだが時間はあるかと聞かれた。何かを売り込む意図の電話だと察知した筆者は即座に会話を終わらせたいと言う気持ちで「今忙しい」と答えた。すると意外にも「では1時間後に掛け直そうか」という実に朗らかな返答を得てしまったのである。どうしてこんなことになってしまったのだろうか。言うまでもなく電話を受けた時には忙しくはなく、これは電話を切るための方便であった。その後似た体験が幾つか続くことによって、このような言い訳は英語では機能しないことに気付いたのである。

本研究ではこのような異文化間コミュニケーションで生じる問題の解決を目指し、日本語と英語における対照分析をする。具体的にはロールプレイの手法により同条件下で収集した日本語と英語の談話資料を分析し、断る際の言い訳に両言語間にどんな違いがあるのかを探る。

2. 先行研究および本研究の目的

2-1. 先行研究

断りについては日本語に関して幾つもの先行研究がある。日本語母語話者の断りを分析したもの（森山（1990）、ザトラウスキー（1993）、横山（1993））、日本語を母語とする英語学習者、或は英語を母語とする日本語学習者の誤用や、語用論上の転移に焦点をあてたもの（Beebe et al.（1990）、生駒・志村（1993）、カノックワン（1997）、Gass & Houck（1999））などである。ザトラウスキー（1993）やカノックワン（1997）では日本語の実際の電話勧誘会話が、横山（1993）及びGass & Houck（1999）ではロールプレイの手法による会話が収集されており、これらはある程度まとまった長さの会話を分析対象としているという点で一致している。そしてこれらの研究では、よく用いられる意味公式や方略、表現形式、及びその出現順序等についての分析がなされている。中でもザトラウスキーは実際に生じた日本語の13の電話勧誘会話を詳細に分析している。勧誘者、被勧誘者それぞれがどのような方略を用いているのか英語の先行研究との比較も交えながら、日本語の特徴を浮き彫りにしている。ただこれも、同条件下で二言語の資料を会話という形で収集し対照分析している研究ではなく、また、上で断り行為に現れる意味公式の研究は既になされていると述べたが、その中の一公式である言い訳に焦点をあてた研究はない。しい

¹ ザトラウスキー（1993）では全章に渡り詳細な日本語の勧誘と断り双方の談話分析がなされているが、日本語母語話者による日本語の会話資料の分析が中心という意味でここに入れた。また横山（1993）も日本人のアメリカ人日本語学習者に対するフォリナートークの分析という観点からの研究なので、日本語の断りのみを研究したものではないが、日本語が研究対象言語ということでここに紹介した。

² この研究は資料をビデオに撮り、日本人英語学習者の顔つきや身振り手振り等、非言語コミュニケーションによる方略も扱っている点で、他の研究と大きく異なっている。

て言えば、日本語では例えば理由の標示機能を持つ「カラ」「ノデ」等に焦点を当てその使用の適切性を論じたものはあるが（藤森（1995）、カノックワン（1997）、西村（1998）等）勧誘の断りに用いる言い訳の内容までに踏み込んだ研究はまだない。

2-2. 本研究で扱う断りの言い訳

断りの研究では Beebe et al. (1990) の意味公式の分類がよく取り上げられるが、その分類ではまず直接的、間接的断りという2つの範疇があり、本研究の対象である言い訳は後者のうちの1つ (Excuse, reason, explanation) として位置づけられている。言い訳は断るために絶対なければならないというものではないが、実際、断る際にはその理由を説明することが多く、この理由の説得力、妥当性如何がスムーズに断りを遂行できるかに大きく影響すると思われる。この Beebe et al. (1990) 以降も断りにおける意味公式の研究がなされており（例えば Gass & Houck (1999), Nelson et al. (2002) 等）特定言語によって使われる意味公式の選択傾向に焦点が当てられ研究されている。

さて、理由を説明するという行為については、Goffman (1971) が「事実上の危害 (= virtual offence)」に対する「修復作業 (= remedial work)」の1つ、という形で説明を試みている。この「危害」とは、例えば本研究の研究対象のような、勧誘者の勧誘に応じないことで相手を傷つけるといった行為のことである。このような危害が生じた、或いは生じることが避けられない場合「修復作業」を行なうことが社会的に期待される。この作業とは「相手を傷つけると見られる行為を容認可能な行為であるように転換するという機能を持つ」(p. 109, 筆者訳) ものである。この作業の方法として「言い訳 (= accounts)」「詫び (= apologies)」「依頼 (= requests)」の3つが挙げられており「前者2つはその性格からして危害が加えられた後に起こるように見受けられるが、以前に起こることもある」(p. 114, 筆者訳) とされている。

この Goffman (1971) の枠組みを使って本研究での言い訳を見てみよう。被勧誘者としては何らかの理由で勧誘を断らざるを得ない、即ち危害が生じること避けられないわけである。しかしながら、この行為によって勧誘者を傷つけることも承知しており、何らかの対策を施す必要にも迫られている。そこで被勧誘者がとる行動は、危害を加えつつもそれを修復する試みを行なうということになる。言い訳という修復作業の1つを実行するということは、つまり相手に危害を加える、ここで言えば断る意図があることを意味し、言い訳が間接的な断りとして機能することになる。まとめると、言い訳は断りのメッセージを送りながら、その断りがもたらす危害を緩和するという複数の機能を果たす大切な言語行為ということができる。この機能が効果的に果たされるためには、言い訳はしさえすればよいと言うものではなく、どんな内容の言い訳をするかということは重要な筈である。友人から何かに誘われて断りたい時に我々は普通「行きたくないから」とは言わず、何か適当な内容の言い訳を考えるだろう。この「適当」という点において文化

2-3. 本研究の目的

- i . どんな内容の言い訳が用いられているか
- ii . 言い訳に対し，誘う側はどのように反応しているか
- iii . ii の反応に対し，断る側は更にどのような反応を示しているか

B : あ：でも今日ちょっと私用事＝
あってさ：

? 上昇イントネーション
 : 延ばす音
 = 次行へ続く
 [] 二者の発話の重複
 (xx) 聞き取れなかった言葉
 (.2) 0.2 秒のポーズ, その他(.5\1)は各々 0.5 秒, 1 秒のポーズを示す
 (笑) 笑いが生じたことを示す

3. 分析資料について

3-1. 資料の性格 なぜロールプレイ資料か

本研究が目指すのは、言い訳を用いて誘いを断る際に日本語と英語の間ではどのような共通点、相違点があり、従ってどんな誤解、摩擦が起こる可能性があるのかを探ることである。そのために各社会において同じような状況下ではどのような言語行動をとる傾向にあるのか、ある程度の数の資料を収集する必要があった。ザトラウスキー（1993）のように実際に生じた会話が収集できるのが理想的であるが、それでは「同じような状況で」「ある程度の数」という要求を満たすのが非常に難しくなる。Mackey & Gass（2005：86）はコミュニケーションを対象にした研究の資料収集の難しさに言及しており「研究者はある程度の数の資料を収集するために文脈を作り出さなければならない」（筆者訳）としたのち、その方法として DCT（談話完成テスト）やロールプレイを挙げている。前者は数多くの先行研究で用いられているが、会話がどのように進められていくのかを見たい本研究には適さない。従って、本研究では談話全体の収集が可能な後者、ロールプレイの手法で資料収集することにした。

3-2. 資料提供者及び資料収集手順

資料は 2002～2004 年に日本とニュージーランド（以下 NZ）の大学においてロールプレイの手法を用いて収集された。友達同士の日本人 32 組、NZ 人 30 組から各々平均 48 秒、67 秒の会話を録音した。会話録音に際しては、まず資料提供者に調査の概略、本日の予定を説明し、本人に関する簡単なアンケート（年齢、性別、大学での専攻等）に記入してもらった。ここから資料提供者の性別及び年齢をまとめたのが表 1 である。

表 1 資料提供者の性別及び年齢

	資料提供者の性別			平均年齢	ペアの内訳			
	男性	女性	計		男性 男性	女性 女性	男性 女性	計
日本	14	50	64 人	21.90 才	7	25	0	32 組
NZ	21	39	60 人	24.28 才	5	14	11	30 組

アンケート記入後は以下のようなロールカードを各々に渡し必要なだけ時間をとって読んでもらった。その際に指示内の「 さん」とはこの会話の相手を指すことを説明した。この会話の課題については、実生活で生起可能であり、できるだけ自然な会話になるように、日本、NZ の研究者に助言を仰いだ上、友人間で起こり得る「飲みへの誘い、それに続く誘いへの断り」とし

た．断り談話の言い訳の内容を調査するため，言い訳については資料提供者自身が考えて決められるように以下ロールカード B 内にあるように指示を出した．

ロールカード A⁴

今は午後，あなたは大学にいて生協食堂に向かって歩いているところです．このところずっと忙しかったのですが，いろいろと一段落ついたので今晩は是非居酒屋にでも飲みに行きたいと思っています．友達の　さんが食堂にいるのが見えました．　さんと一緒に居酒屋へ行くのはとても良いアイデアです．きっと楽しく過ごせるでしょう．では　さんに話しかけましょう．

ロールカード B

今は午後，あなたは今生協食堂にいます．このところずっと忙しかったので，今日は家でゆっくり TV を見るなり，のんびりしようと思っています．友達の　さんがこちらに向かって歩いてくるのが見えました．何か楽しそうにしています．ひょっとしたら何かに誘われるかもしれません．もし誘われても何か理由をつけて断る⁵つもりです．

資料提供者の 2 人がカードを読み終わり会話を開始する準備ができた時点で，役割 A の人に役割 B の人から少し離れた所に立ってもらった．B は椅子に座っている状態で，A が立ち位置から B に向かって歩き，B を見つけ話しかけるという要領で会話を開始するように依頼した．

3-3．書き起こし過程

Schiffrin (1994) を参考に書き起こしたものをここでは分析資料とする．日本語資料は筆者が書き起こしをした．英語資料はまず書き起こしを本職とする英語母語話者に依頼し，その後，筆者がテープを聞きながら訂正を加えた．これは，通常議事録の作成等目的とする書き起こしでは軽視，無視されがちなポーズ，相づち等を確実に拾い資料の正確さを期するためである．

全会話を書き起こした後，その中から先に会話例 1 に見たような言い訳，即ち「居酒屋に行けない/行かない理由」に言及した発話を 1 つ 1 つ拾っていき，表に書き出していった．殆どの会話で複数回言い訳が出現したのだが，言い訳が出るごとに勧誘者であるロール A の反応についても書き出していった．この表を作成した後，その内容如何によって次節にあるように「用事」「体調不良」と分類した．

⁴ NZ での資料収集には，同様の内容の英語で書かれたカードを用意し，同じ手順で調査を進めた．

⁵ 下線は実際に用いたカードでも引かれていた．

4. 分析結果

4-1. どんな内容の言い訳が用いられたか

ロールカードに「何か理由をつけて」と指示してあったため殆どの資料で断る理由 言い訳が現れた。各資料で、A による勧誘の直後に見られた言い訳を内容別に分類した結果が表 2⁶ である。

表 2 どんな内容の言い訳が用いられたか

	日本	NZ
用事	8	9
体調不良	11	5
忙しい	3	1
宿題	2	5
家でゆっくり	3	4
金欠	1	2
その他	4	4
計	32	30

項目ごとに日本/NZ 資料から 1 つずつ以下に例を挙げていく（二重下線が言い訳該当部分）。

会話例 2 「用事」

日本ペア 7 勧誘部分冒頭

A：今日：久々に飲みに行きたいと思うねんけど行かへん？

B：

あ：でも今日ちょっと私用事＝

あってさ：

会話例 3 「用事」

NZ ペア 26 勧誘部分冒頭

⁶ その他についてだが、まず日本資料の 4 例のうち 3 例は「主人が出張中」「面倒くさい」「酒は弱い」といった言い訳をし、どれも 1 つずつしか現れずかつ NZ 資料には全く現れなかったので項目として立てなかった。あと 1 つは、勧誘後すぐに言い訳が現れず「今日は駄目」で A にターンが移った場合である。この場合、A に質問され B の「今日は飲みたい気分ではない」という断りで A は勧誘を諦めている。NZ 資料の 4 例はどれも A の勧誘直後に言い訳が出なかった例である。うち 1 例は B が「今晚は駄目」と言いその直後に週末はどうかという提案をしたところ、A がそれをすぐに受け入れたためそれ以上言い訳が出てくることはなかった。また「今晚は駄目」はもう 1 例あり、B のこの発言の後に A の質問があり「宿題」「金欠」といった言い訳が付け加えられた。それから「また今度」との答えが B から出たものもあった。この後 A から再度勧誘され「家でゆっくりしたい」と言ったところ、A はすぐにそれを了承した。最後の 1 つは B が何の言い訳も与えず返事を保留にしそのまま会話が終わってしまった場合である。

A : I was thinking about doing something tonight [Come on] come on come on

B : Are you (.5) Um [actually]

(.5)

B : Ah so:rry I already I already have something planned well

会話例 4 「体調不良」

日本ペア 1 勧誘部分冒頭

A : 今日はちょっとはあと飲みに行きたいなあとか思っていたんだけど : B さんどう ?

(1)

B : 頭痛い

会話例 5 「体調不良」

NZ ペア 13 勧誘部分冒頭

A : We want to go to the pub. What do you reckon

(1)

B : U:m no I'm a bit tired

会話例 6 「忙しい」

日本ペア 31 勧誘部分冒頭

A : 行こうや : ふふたまにはこう (xx) らんとふふ うん

B : え : でもね最近ね : 何か 凄いレポート =

トとかね : バイトとか忙しくって

会話例 7 「忙しい」

NZ ペア 5 勧誘部分冒頭

A : I really wanted to go out tonight, eh

B : Oh I've actually I'm quite busy tonight I've actually got =
pilates tonight

会話例 8 「宿題」

日本ペア 14 勧誘部分冒頭

A : 今日久しぶりに (.5) 飲みに行かん ?

(.5)

B : 飲みに ? (.2) いやでも俺明日 : 出さなあかんレポートあるから : 別に : え : わ

会話例 9 「宿題」

NZ ペア 12 勧誘部分冒頭

A : I was wondering if you wanted to go out tonight

B : Oh (1) oh no I've still got assignments and stuff so

会話例 10 「家でゆっくり」

日本ペア 17 勧誘部分冒頭

A : え : 今日ね何か居酒屋に行こうかな : 行きたいな : と思って

B : あ : そっか : あ : う : ん =
ちょっと行きたいな : と思うけど : やっぱ久しぶりにゆっくりテレビとか見たいな : と =
かと思うんだけど

会話例 11 「家でゆっくり」

NZ ペア 1 勧誘部分冒頭

A : We should go out tonight to a pub or something for some drinks

(.2)

B : Um (.2) um I really kind of wanted a nice night home

会話例 12 「金欠」

日本ペア 10 勧誘部分冒頭

A : 一緒に飲みに行かへんかな : と [思って] うん

B : [あ : :] 飲みか : 今つっとお金ないんだよね :

会話例 13 「金欠」

NZ ペア 4 勧誘部分冒頭

A : We should go out tonight

B : Oh yeah u::m I could but I don't really have any money eh ?

上の会話例から日本、NZ 資料双方で同じような言い訳が現れたことが分かる。しかしながら表 2 に示した生起数を見ると、特に体調不良が日本資料で多い等、各言い訳の使用頻度は異なっている。好まれる言い訳は両資料間で異なることが考えられる。

4-2. 言い訳に対し、誘う側はどのように反応しているか

B が断った後両資料とも約三分の二 (日本 : 全 32 中 21, NZ : 全 30 中 19) で A が再度誘っている。どのように誘っているかをまとめたのが表 3 である。

表からだけでは具体的にどのような例を指しているか分かりにくいと思われるので以下に例を交えながら説明する。まず B への断りの反駁とは例えば以下のような例である (二重下線 が該当部分)。

会話例 14

日本ペア 5 勧誘部分冒頭

A : 飲み (.2) 行かない ? [何かあるん ?]

各々その名の通りで、「B: 頭が痛い」「A: 風邪?」(詳細), 「いろいろ一段落ついたから飲みたかったんだよね」(理由), そして特に B からの言い訳に対してどうこうというのではなくただ「行こうよ」と第一勧誘を繰り返したような例(単純な勧誘)である。

NZ 資料でのみ現れた譲歩案の提示とは, B の事情を尊重しつつ, かつ自分の勧誘を受け入れてもらおうという案である。例えば以下のような例である(二重下線が該当部分)。

会話例 16

NZ ペア 23 勧誘部分冒頭

A: I just want to forget about it tonight feel like going out [What] are you doing =

B: Yeah yeah [no]

A: tonight ?

B: Well I'm actually going to stay I'll actually go home (.2) and um (.2) you know just = have some time out. I just really need to be You know (.2) get to bed early and yep =

A: Yeah

B: just have a quiet night at home

A: Um (.5) ah (1) okay (2) what about some a couple of (xxxx) = after campus

A はここで, 授業後にちょっとだけ飲むというのはどうかと提案している。A は統計学のテスト勉強で忙しくて (= 上記会話の前に起きたスモール・トークでの内容) 今夜は飲んでそれを忘れてしまいたいと思いつつも, B が家に早く帰って休みたいというのでその意志を尊重しつつ「じゃあちょっとだけ」と提案しているところから譲歩案の提示とした。

「別の日提案」は「じゃあ明日は?」と持ちかけた例である。最後の「it would be great」は「B が来てくれたら素晴らしい (= great)」ということであるが, どうまとめ直していいか難しく, NZ 資料で現れた再勧誘表現をそのままここに挙げた次第である。

さて表 3 から言えることだが, 日本資料でも NZ 資料でも同じような再勧誘の方略が見られたが, 好まれる方略には違いがありそうだということである。例えば「B の断りへの反駁」は日本資料に多く, 「譲歩案提示」は NZ 資料でのみ見られた。4-1. で見たように日本資料と NZ 資料では好まれる言い訳の傾向が異なったのだが, これが再勧誘の方略の違いと関係しているかもしれない。そこで, 両資料で現れた「用事」「体調不良」「宿題」「家でゆっくり」「忙しい」「金欠」の 6 つの言い訳について次に続いた A の反応がどうだったか各々見てみよう。調べた結果をまとめたのが表 4 である。

表 4 を見ると, 表 3 で見た A の再勧誘の仕方の二国間における相違は, どうやら言い訳の内容によるものではなさそうである。各言い訳ごとに日本と NZ を比べると, 使用される第二勧誘

表4 Bに断られた後のAの反応

Bの言い訳 Aの反応	用 事		体調不良		宿 題		家でゆっくり		忙 し い		金 欠	
	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ
誘わない	5	3*	4	2 ^a		1	1	1	1	1		1
Bの断りへの反駁			3	1	2							
念押し	3	1	1			1	1	1	1			1
詳細を聞く			3					1				
飲みたい理由を言う		1				1	1		1			
単純な勧誘											1	
譲歩案の提示		2		1		2		1				
別の日提案		1										
It would be great		1		1								
計	8	9	11	5	2	5	3	4	3	1	1	2

会話の終わりで「気が変わったらきてね」という誘いが、*は2例、^aは1例あった

の方法が一致するとは言えない。特に網掛け部分、「譲歩案提示」と「Bの断りへの反駁」に関しては二国間で差があることが見てとれる。そしてBの言い訳に関する詳細を質問する方法も、日本資料でやや多い。ここから、断りの言い訳に関わらず日本人、NZ人が好んでとる再勧誘の方略があり、両者ではその傾向が異なっていることが示唆される。

以上は再勧誘をした場合についてだが、両資料で約三分の一は再勧誘をしなかった⁸。日本資料で11、NZ資料で10あったのだが、このうち両資料で一組ずつ、今晚の代わりに明日飲みに行くことになり、NZ資料でのみ3組がAから「気が変わったら来てね」という誘いが現れ、Bがそれを了承している。これらを差し引くと、Bに断られてAが再度試みることなく誘いを諦めた場合が、日本資料で10組、NZ資料で6組であったということになる。ここから全体的に日本の方が1度断られたらそこであっさり諦める場合が多かったと言える。

4.3.4.2. の反応に対し、断る側は更にどのような反応を示しているか

これについてまとめたのが表5である。簡単に説明すると、「また今度」と言うのはその名の通りBが「また今度」と言った例である。「同じ言い訳」「別の言い訳」というのは、再勧誘を

⁸ NZ資料の1組では全く勧誘が行われない、別の1組ではBが勧誘への返事を受け入れも断りもせず保留にしAが保留と言う決断に従った。勧誘が行われなかった組は、Aが居酒屋の話を一切しないでまず今晚の予定を尋ねBが忙しい旨を伝えたため、その時点で勧誘を諦めてしまったものと思われる。このような、勧誘しない或いは勧誘は生じたが保留となった例は日本資料では全く現れなかった。この相違についての議論は紙幅の都合上別の機会に譲るが、保留の件についてはKawate-Mierzejewska (2002)に興味深い報告がある。彼女の日本人、米国人対象の断りの研究で、やはり米国人の会話でのみ保留という結論に至った例が見られたのである。

表5 Aの再勧誘を受けBはどのように答えたか

	日本	NZ
また今度	4	1
事情を説明	4	1
同じ言い訳	3	4
別の言い訳	2	5
単純な返事	1	1
反駁	2	0
Aに同調	1	0
譲歩案拒否	0	3
今日はよし	0	1
他人と行く事を勧める	0	1
計	17	17

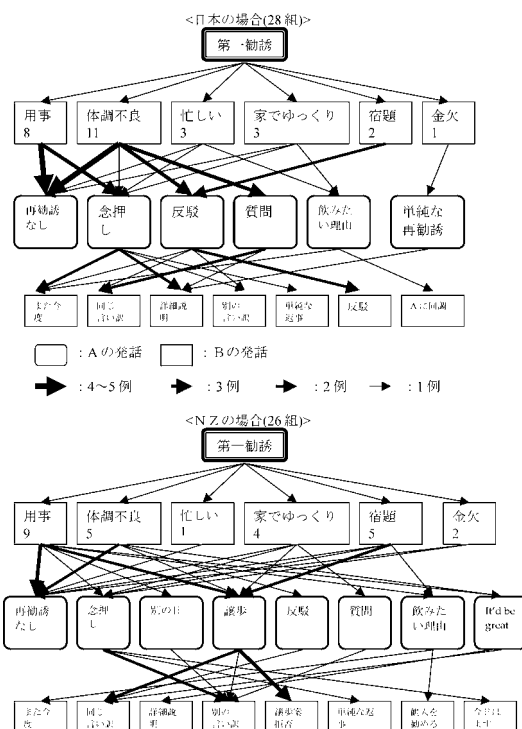


図1 第一勧誘 第一言い訳 第二勧誘 第二言い訳の流れ

受ける前に使った言い訳と同じ、または違う言い訳を使ったということである。「事情を説明」とは、前出の言い訳を更に詳しく説明したものである。また「単純な返事」と言うのは、A に念押しをされて（日本資料では「まじで」NZ 資料では「are you sure」が典型例）、うん、yes などと答えた例である。「反駁」は日本資料でのみ現れたのだが、例えば「B：頭痛い」「A：飲めば治る」と反駁され、更に「B：もっと痛くなる」と反駁し返した例のことである。あとの項目はその名の通りである。

ここから日本と NZ ではやはり好まれる対応の仕方が違うことが推測できる。この点も含めて一番はじめの勧誘からまとめたのが図 1 である。矢印の太さによって例数を示している。太い矢印、数多くの矢印を集めているものがより多く現れたということである。但し、A による第一勧誘から B による第一言い訳の間の矢印は単純に細い矢印を用い、生じた例数をその四角の中に示した。この図を一見しただけでも、日本と NZ の断り会話の進み方が構造的に違うことが推察できる。

5. 考 察

以上 B の断る際の言い訳を中心に、本資料ではどのように会話が進んでいったのか見てきた。前節で見た分析結果から言えることは、日本と NZ 間で、勧誘に対してよく使われる断りの言い訳が異なること、また一旦断られて更にどのように誘うかという点、またその再勧誘に対して更にどのように断るかという点でも二国間では差がありそうだということである。ここでこれら相違点について更にもう少し考えたい。

5-1. どんな言い訳が好まれるのか

両資料で同じような言い訳が観察された。特に両資料ともで「用事」と「体調不良」で過半数、若しくはそれに近い数を占めた。先に挙げた表 4 を見れば分かるように、これらを言い訳として用いた場合には、両資料共で A が再勧誘をしなかった例がかなりあり、従って断りとしてうまく機能する言い訳だったと見ることができるだろう。

相違点として 1. 日本資料の方に「体調不良」を挙げた場合が多かった、2. 「体調不良」ほどではないが、日本資料の方に「忙しい」と断った場合が多かった、3. 同じく NZ 資料の方に「宿題」を理由に断った場合が多かった、という 3 点が挙げられる。

5-1-1. 日本人の体調を話す傾向

バーンランド (1979) の日本人、米国人を対象にした会話のトピックに関する調査によると、どんな話題でも米国人の方が日本人よりよく話すという結果が報告されている。Gudykunst and

Nishida (1983) でも殆どのトピックでは米国人の方がよく話すと報告されているが、体調に関するトピックだけは日本人の方がよく話すという結果が出ている。本研究では日本資料、NZ 資料共に「体調不良」が出現したが、NZ のそれが全て「疲れている」という言及に留まったのに対し、日本資料のその半数は「疲れている」、あとの半数は腹痛、頭痛などを訴えるものであった。先行研究の報告は本研究の日本人の「体調不良」頻用につながっているのかもしれない。

5-1-2. 「忙しい」は常套句か

ネウストブニー (1982: 73) は「忙しさ」について日本人と自身がうける印象の違いを論じている。そして一例として「英語国の社会では、人と人とがつき合うのは、権利だけでなく、義務でもある。したがって、パーティに招待されると、その招待をことわる唯一の理由は先約である。招待を受けるかことわるか、電話口でためらったり、「来週はちょっと忙しい」と言ってことわったりするという行動は、侮辱のように受けとられる」と述べている。本研究の結果を待つまでもなく、日本人は「忙しい」を理由に様々なことを断ったり、或いは特に何か断るような必要性がなくともいつも忙しんでいるようなところがある。この日本人にとっての「忙しい」と同等の機能を果たす表現として中国語には「開会」があるそうである（私信による）。これは会議、ないしは人と会う約束があるという意味で、断りの理由として少なくとも都市部である上海地域では頻用される表現だそうである。本研究で「忙しい」が日本資料により多く現れたのは、この表現が言い訳の常套句として日本語に定着しているということがあるかもしれない。

5-1-3. 「宿題」

日本、NZ 資料ともで例が複数出現したので「宿題」という項目を立て、表 2、及び表 4 に示したが、すべきことがあるという意味で「用事」に分類してしまうことも可能であったろう。今回は大学で学生を対象に資料収集をしたため「宿題」という言い訳が出現したと思われる。結果をより一般化するためには「用事」に入れた方が良かったかもしれない。すると NZ 資料では「用事」だけでほぼ半数を占めることになり、これは先に引用したネウストブニーの記述に沿うものである。

5-2. どのように折り合うか：第二勧誘の仕方 反駁か譲歩か

両資料とも約三分の二が再勧誘を試みたが、その試み方では「断りへの反駁」と「譲歩案の提示」において両資料間の差が目立った。前者は日本資料で、後者は NZ 資料での使用頻度が高かった。後者についてだが、表 3 では日本資料の頻度は 0 になっているが全会話を通して全くなかった訳ではない。と言うのも、日本ペア 7 では B が用事がある、と断ったのち暫く話が続き、B が会社訪問であることを伝えた時点で A が「何時に終わるか」と尋ねているのである。その

後 B は「これから大阪へ行く」と伝えここで勧誘の試みが終わってしまうのだが、「何時に…」という質問は譲歩案の提示に先立つ質問と解釈することもできる。しかしながら、日本資料では「譲歩案の提示」が用いられない傾向にあったと言って差し支えないだろう。「譲歩案の提示」が NZ 資料、即ち英語資料でのみ見られた点に関連してザトラウスキー（1993）は「酒を飲みに来るように誘う談話」の分析において日米の違いに言及している。ここで研究対象になった談話では、勧誘者が酒を飲みに来るように誘い、被勧誘者はテレビを見ていることを伝えている。そしてここから勧誘者がこのテレビ番組について尋ね、そして番組への肯定的評価を与えることによりしばらく番組に関する会話が続けている。ザトラウスキーは「英語の会話だと、38S『始まったばかりー？』という発話の代わりに、『後、何分残っている？』とか『もうすぐ終わる？』とかいうような、承諾の余地を残す発話を用いて、S が談話を進めるであろう」（1993：133）と述べている。この日米の違いはまさに、本研究の NZ 資料でのみ譲歩案の提示が出たことに一致すると思われる。

5-3. 説明の必要性

再勧誘の仕方では、「詳細を聞く」と「念押し」が日本資料で NZ 資料よりもやや多かった。これら 2 つは談話におけるその機能を考えると、どちらとも聞き手に情報要求をしていると言える。「念押し」の典型例は日本で「まじで」、NZ で「are you sure」であったのは前に述べた通りである。これらに対し「はい」という返事だけで済ませることも可能である。しかし、実際には両資料でそこで勧誘談話が終わってしまうことはなく、更に次の質問、或いは念押しの繰り返しが続いていた。この実態より「念押し」を次の質問への先行句と考え、表 3 の「詳細を聞く」と「念押し」を合わせると、第二勧誘として「質問」をしたのは、日本資料では 11 組、NZ 資料では 6 組となる。つまり、被勧誘者に断りの説明を要求することが日本資料でやや多いという訳である。現に、表 5 を見ても日本資料の方で「事情説明」が多く、被勧誘者が説明を供給している様が見てとれる。

実はこの日本資料での説明が多い様は、勧誘部分でも観察された。日本資料で 16 組が飲みに行きたい理由に言及しているのである。NZ 資料でのそれは 10 組であった。また「久しぶりに/たまには飲みに行こう」と誘った例もあった。これらを「しばらく一緒に飲んでいないので飲みたい」というように理由を提示していると読み取れば、飲みに行きたい理由に言及したのは総計日本資料で 21 組、NZ 資料で 11 組となる。また日本人と米国人の比較ではあるが、例えば Watanabe（1993）により、日本人のより詳細を説明する様子が報告されている。

5-4. 断り談話はどのように展開するのか 日本資料の特徴、NZ 資料の特徴

過半数の A が「今晚 B と飲みに行く」ことを果たすために B に一度断られてもすぐに諦めな

かったという点では日本、NZとも同じだったわけだが、そのやり方は異なった。各国に好まれる言い訳は存在するが、それは異なり、また、その言い訳に対する勧誘者の反応の仕方も異なった。以上から両国における勧誘断り談話の一般的な流れをまとめるとどうなるだろうか。

まず日本資料では「忙しい」や「体調不良」が言い訳としてよく用いられた。これは断りとは関係なく日本人が好む話題でもある (Gudykunst and Nishida, 1983)。続いて、言い訳を受けて勧誘者は再勧誘をする際に言い訳に対して反駁する傾向にあった。また興味深いことに、日本資料でNZ資料より多くの勧誘者が再勧誘をしなかった。このような勧誘者の反応振り、即ち再勧誘する場合は反駁を、そうでなければあっさり諦める様子は、言い訳の内容には大して注意を払わず、言い訳を単に「断りの記号」としか受け取っていないと解釈できはしまいか。つまり言い訳の内容を鑑みその内容に基づいて交渉はせず、更に押し進めるか (= 再勧誘) あっさり引いてしまうか (= 諦め) の二者択一的に振舞うというわけである。母語話者はこのようなからくりを承知で会話を進めているものと考えられ、断りの言い訳が日本語会話では反駁を受けやすいところから、翻されにくい言い訳、つまり「体調不良」を選びがちだとも考えられる。友人に「頭が痛い」と言われれば、頭痛を即座に取り除くなど、それをどうにかすることはできない。また、言い訳が単なる「断りの記号」としか取られないことから所謂常套句を用いる可能性が十分考えられる。内容云々よりも断り用の決まり文句を使って「断っている」ということを伝えることが重要なのである⁹。但し日本語であっても本音で言い訳を言う場合が考えられ、それをはっきりさせるには、勧誘者が質問を繰り返し被勧誘者から詳細を聞くしか他に方法はない。また本資料における勧誘部分、他の先行研究からも日本語で説明がより詳細に現れる様を見た。これらが日本資料でのAの詳細要求(表3参照)及びBの詳細説明(表5参照)に繋がることになるのだろう。次の会話はAの勧誘を受け、Bが「サークルがある」と言い訳してからAが諦めるまで、サークルに関する質問 応答がしばらく続いており、言い訳の実態を明らかにしようとする日本資料の傾向を示す例と言えよう；

会話例 17

日本ペア 20 Bの断り部分から

B: あ: サークル行って練習しようかと思っった

A:

えサークルって練習する練習: サークル=

⁹ 先に本研究の談話の流れを図1として示したが、日本資料を示した図の方が引かれた 数が少なくすっきりしていることが見てとれる。日本語の特徴として、ある特定場面で決められた行動をとる様を示唆しているのかもしれない。筆者は、以前ある米国人日本研究者から「米国人と比べ、日本人は特定場面で決められた表現を使うことで、それは一見意見を保留したり、曖昧にはぐらかしたりしているように見えて、実は明確なメッセージを伝えている」という私見を聞いたことがある。本研究の資料もこれに沿っていると言えよう。

勧誘を進めるべく譲歩案を提示した。これは英語的に当然の行為だったと言える。実際の場面で被勧誘者は、譲歩案の提示に面食らい口ごもってしまったのだが、今回の資料の結果から譲歩案をきっぱり断っても良かったのだと分かる。また、最初から譲歩案があり得ない言い訳を言うか、或いはきっぱりと「No」と言うべきだったのかもしれない。少なくとも「忙しい」は相応しい言い訳ではなかったことは確かなようだ。この際のとるべき対応についてはもっと別の研究が必要だが、「忙しい」では1時間後に...というやり取りが英語での普通のパターンであることは本研究の資料から明らかにされたと言える。

前節で日本、NZ 資料で見られた相違をまとめたが、これはまだ推論の域に留まっていると言わなければならない。今後、更に別の課題を取り上げ、日英でどのような断り方、誘い方の違いがあるのか、そして本研究の結果とどのような相違点、或いは共通点があるのか見ていく必要があるだろう。

参 考 文 献

- 生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：『断り』という発話行為について」『日本語教育』79号, 41-49.
- 大浜るい子・西村史子(2005)「日英のターン交替と相づち使用の実相——日本人学生とニュージーランド学生の比較を通して——」『社会言語科学』第7巻第2号, 78-87.
- 熊取谷哲夫(1993)「発話行為対照研究のための統合的アプローチ——日英語の『詫び』を例に——」『日本語教育』79号, 26-40.
- ザトラウスキー・ポリー(1986)「談話の分析と教授法(I)——勧誘表現を中心に——」『日本語学』第5巻第11号, 27-41.
- (1986)「談話の分析と教授法(II)——勧誘表現を中心に——」『日本語学』第5巻第12号, 99-108.
- (1993)『日本語の談話の構造分析——勧誘のストラテジーの考察——』, くろしお出版.
- 西村史子(1998)「中級日本語学習者が書く詫びの手紙における誤用分析——文の適切性の観点から——」『日本語教育』99号, 72-83.
- (2005)「勧誘談話における断りの日英対照分析——言い訳に注目して——」『社会言語科学会第16回大会発表論文集』, 16-19.
- ネウストプニー, J.V.(1982)『外国人とのコミュニケーション』, 岩波新書.
- バーランド, D.C.(1979)『日本人の表現構造』(西山千・佐野雅子訳), サイマル出版.
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子(1996)「不満表明ストラテジーの使用傾向——日本語母語話者と日本語学習者の比較——」『日本語教育』88号, 128-139.
- 藤森弘子(1995)「日本語学習者に見られる『弁明』意味公式の形式と使用——中国人・韓国学習者の場合——」『日本語教育』87号, 79-90.
- 森山卓郎(1990)「断りの方略：対人関係調整とコミュニケーション」『言語』第19巻第8号, 59-66.
- 横山杉子(1993)「日本語における、『日本人の日本人に対する断り』と『日本人のアメリカ人に対する断り』の比較——社会言語学のレベルでのフォリナートーク——」『日本語教育』81号, 141-151.
- ラオハブナキット・カノックワン(1995)「日本語における『断り』——日本語教科書と実際の会話との比較——」『日本語教育』第87号, 25-39.
- (1997)「日本語学習者に見られる『断り』の表現：日本語母語話者と比べて」『世界の日本語教

- 育』第7号, 97-112.
- Beebe, Leslie M., Tomoko Takahashi, and Robin Uliss-Weltz 1990 Pragmatic transfer in ESL refusals. In Scarcella, Robin C., Elaine S. Anderson, and Stephen D. Krashen (eds.) *Developing communicative competence in a second language*. Boston, Mass.: Heinle & Heinle Publishers. 55-73.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson 1987 *Politeness: Some universal in language usage*. New York: Cambridge University Press.
- Gass, Susan M. and Noel Houck 1999 *Interlanguage refusals*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Goffman, Erving 1971 *Relations in public*. London: Allen Lane The Penguin Press.
- Gudykunst, William B. and Tsukasa Nishida 1983 Social penetration in Japanese and American close friendships, *Communication yearbook vol. 7*. New Brunswick, N.J.: International communication Association, 592-610.
- Kawate-Mierzejewska, Megumi 2002 The interface of initiations/re-initiations on refusal sequences in conversational discourse, *AILA 2002 Abstracts*, 135.
- Mackey, Alison and Susan M. Gass 2005 *Second language research: Methodology and design*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Nelson, Gayle L., Joan Carson, Mahmoud Al Batak, and Waguida El Bakary 2002 Cross-cultural pragmatics: Strategies use in Egyptian Arabic and American English refusal. *Applied linguistics vol. 2*, no. 2, 163-189.
- Schiffrin, Deborah 1994 *Approaches to discourse*. Cambridge, Mass.: Blackwell.
- Tannen, Deborah 1984 The pragmatics of cross-cultural communication, *Applied linguistics vol. 5*, no. 2, 189-195.
- Thomas, Jenny 1983 Cross-cultural pragmatics failure, *Applied linguistics vol. 4*, no. 2, 91-112.
- Watanabe, Suwako 1993 Cultural differences in framing: American and Japanese group discussions. In Tannen, Deborah (ed.) *Framing in discourse*. New York: Oxford University Press. 176-209.